

ICTを活用した多角的な実践

～主体的・対話的で深い学びを目指して～

三島村立三島硫黄島学園

1 研究のねらい

これからの社会においては、一人一人が自分のよさや可能性を確認するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが求められる。

しかし、本校は極小規模校であり、児童生徒は集団の中で考えを伝えたり意見を交換するなど、多様な人々と協働して学習する機会が非常に少ない。また、教科担当教員が1人しか配置されていないため、お互いの授業力向上のための意見交換もなかなかできない状況であった。

そこで、児童生徒がICTを多角的に活用することによって様々な人と関わりをもち、主体的・対話的で深い学びを行えるようにするとともに、「子供の学びの事実に基づく授業研究」により、教科に関係なく児童生徒の視点に立った授業改善を行い、指導力の向上を目指したいと考えた。

2 研究の概要

- (1) 小規模校、完全複式の児童生徒に、主体的・対話的で深い学びを実現するために、ICTをどのように効果的に活用していけばよいかを研究する。
- (2) 「子供の学び」の事実に着目し、その心のつぶやきまで想像し、どのような支援や指導が必要かを考え、教科を越えて意見交換する授業研究の方法を三島村全体で実施できないか研究し、教師の指導力の向上を図っていく。

3 研究の内容

- (1) ICTの効果的な活用
 - ア 主体的・対話的で深い学びにつながるタブレットの活用
 - イ 効果的な遠隔授業の方法
- (2) 村内の学校と連携した「子供の学びの事実に基づく授業研究」の方法

4 研究の実際

- (1) ICTの効果的な活用
 - ア 主体的・対話的で深い学びにつながるタブレットの活用
 - (ア) タブレットの文房具化を図り、常に授業中は机の横に置き、調べたり記録したりできるように習慣化を図っている。
 - (イ) 児童生徒が自ら課題を見つけ、主体的に学びを進めていくためにもタブレットは必要不可欠である。Teamsを利用して出された課題を解決したり、児童生徒同士で意見を比較したり、チャンネル内でコミュニケーションを取ったりして協働的に学習を進めている。



タブレットの活用

イ 効果的な遠隔授業

- (ア) 遠隔合同授業
村内外の学校と教科等の遠隔合同授業を行うことにより、狭い人間関係の中での意見交換ではなく、多様な見方・考え方に触れることができ、協働的な学習にも繋がっている。
- (イ) 免許外教員への支援
全教科の教員が配置されないため、臨時免許を取得して対応しているが、遠隔教育システムで村内の学校をつなぎ、本免許を持った教師がT1、臨時免許を持った教師がT2となり、専門性の高い遠隔授業を実現している。
- (ウ) 外部講師による遠隔授業
様々な分野の専門家による外部講師と三島村4校が遠隔合同授業を行い、深い学びに繋げる機会を増やしている。
- (エ) 複式授業の解消



免許外教員への支援

複式学級の担任同士が遠隔教育システムで結んで、各学年の授業を分担し、同学年の児童を1時間通して指導を行うことで、複式授業の単式化を図っている。



国会議員との遠隔授業

- (2) 村内の学校と連携した「子供の学びの事実に基づく授業研究」の方法
コアスクールプロジェクトエリア推進校として2回の実践を行ってきた。
ア 学校教育目標から、学校全体としての【目指す児童生徒の姿】を決定

【目指す児童生徒の姿】

- ・学ぶことの楽しさを知り、主体的に学ぼうとする意欲をもつことができる。
- ・複数の文書や資料から情報を読み取って根拠を明確にして自分の考えを書くことができる。
- ・他者との違いを認識し、自分の意見と他の意見を尊重することができる。
- ・他者との交流をすることで、新たな意見を作り上げることができる。

- イ 【目指す生徒の姿】を基に研究授業での【本時の目指す児童生徒】を決定
ウ 遠隔による研究授業の参観と動画撮影、三島村4校と教育委員会が遠隔で視聴
授業分析まで一週間の期間を設け、Teamsに投稿。当日の授業を参観できなかった場合やもう一度見直したい場合はそこから視聴できるようにした。

エ 遠隔による授業分析

授業分析の方法を他の3校にも伝えるために硫黄島学園の3つのグループの中に他の3校の参加者を入れてTeams内で協議を行った。遠隔で授業分析を行うため、付箋紙に書いた記録をパワーポイント内に出し合っ行った。その後、課題の残った事実を目を向け職員一人一人が、児童生徒の展望について考え意見を出し合い、支援や指導の在り方を協議した。



パワーポイントに子供の事実を入力



ブレイクアウトルームでの授業分析・研究協議

5 研究のまとめ

(1) ICTの活用

ア 成果

- ・児童生徒が思考を整理する際のツールとしてタブレットを活用するのは有効である。学習用具として定着し、学習内容に合わせて自ら選択して使用する姿が見られるようになった。
- ・学習の導入やまとめで楽しみながら効果的に学習に取り組むことができた。単元の終末で、学習の成果をまとめる活動が充実した。
- ・遠隔授業での他校との合同授業、専門家による遠隔授業、生徒会同士の交流学习など、島内外の学校や専門家等とつながり、多様な意見に触れ考えを深めたり、積極的に発言したりする姿が見られてきた。

イ 課題

- ・遠隔授業の中で、発表の方法やカメラワーク、資料の提示の仕方などを意識し、自分の考えをよりよく伝えられるように、児童生徒の力を高めていく必要がある。

(2) 「子供の学びの事実に基づく授業研究」の方法

ア 成果

- ・児童生徒の視点に立って授業改善の方向を短期的、長期的に考え、共通理解・共通実践につなげることができた。授業づくりを考える基礎ができた。

イ 課題

- ・展望を考える際、職員の目的意識がぶれてしまうと間違った取組になるおそれがある。

6 今後の取組

今年度、遠隔授業や合同の授業分析の実践を通して、学校を越えて職員同士の話し合いや意見を聞く機会が多くなった。「子供の学び」のために授業改善をしようといういろいろな意見を出すことができる雰囲気をつくるのが、児童生徒の主体的・対話的で深い学びにつながっていると実感した。職員相互に自由に意見を述べ合う雰囲気をつくるのが、よりよい学校づくりにつながる。